

興きぼうも遣やるるの吟ぎん

伊達政宗

馬ば上じょう青せい年ねん過すぐ。  
時とき平へいかかににして  
白はく髪はつ多おし

残ざん軀くは天てんの許ゆるす所ところ  
樂たのしままずずして復また如い何かんせん

【作者】伊達政宗（一五六七〜一六三六年）（永祿十年〜寛永十三年）・安土桃山時代〜江戸初期の武将。仙台藩主。徳川方に属し、仙台六十二万石の

基礎を築く。

【語釈】\*馬上…戦いのなかで。戦闘場裏に。 \*残軀…のこりの身体。老後のわずかばかりの身命。 \*白髪…しらが。白髪頭の老人

【通釈】戦場を駆け抜けた青年時代、太平の今では白髪がみえるようになった。生きながらえているのも天命なのだ、  
あるがままを楽しまないで何としよう。

【備考】戦国時代の終わりに遅れて生まれて、奥州（今の岩手、宮城、福島辺り）を席捲した戦国武将、「独眼龍」こと、伊達政宗の残した漢詩です。この政宗という人物、政治家、軍人としてだけでなく、文化人としても一流のものがあつたようです。この漢詩からもその一端が伺えるような気がします。政宗は、ただたる戦国大名の中でも、遅れて生まれてきた人で、彼がその勢力を拡大して、天下へ名乗りを上げようとした頃には既に豊臣秀吉が、次いで徳川家康が統一を成し遂げようとしていた時代であり、結局政宗は、その統一政権下の一大名の地位に甘んじるしか無かつたのです。しかし、晩年まで彼の志は常に天下を狙う事にあつた…と言うのはよく、時代小説などで語られる所ですが、実際に彼にはそれだけの器量があつたようです。その為に豊臣政権下でも、徳川政権下でも、重用されつつも、常に警戒されていたのです。そして、彼の生涯は徳川幕府が安定を見せた頃に終わります。天下泰平の世となり、その中で若い頃を戦場の中で過ごした老人が一人、花に向かつて酒を飲みながらこんな詩を吟じる…：そんな風景が目に見えます。若い頃をほとんど戦場で過ごした私は、今の泰平を楽しみきることが出来ない…：結局、私は乱世の人間でしかないのだなあ…：そんな嘆きともぼやきともつかない感慨が、この詩には込められているような気がしてなりません。